

石川

ISHIKAWA PREFECTURAL
MUSEUM OF HISTORY

れきはく

No. 144
2023.9.29



令和5年度
秋季特別展

御殿の美²⁰²³ 10/14(土) ▶ 11/26(日)



(上) 【長浜市指定文化財】松虎図(宮川祭囃々館楽屋襖) 岸駒筆 享和4年(1804) 長浜市宮司東町自治会蔵

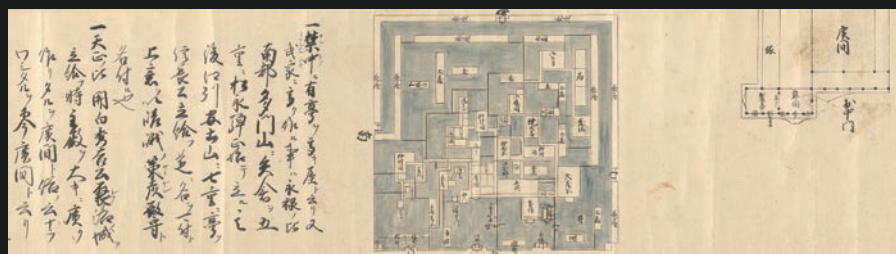
(下) 【重要文化財】二条城二の丸御殿 遠侍二の間障壁画 竹林群虎図 狩野甚之丞筆 寛永3年(1626) 京都市(元離宮二条城事務所)蔵

御殿の美

近世城郭において政治・儀礼・生活の場であった「御殿」。幾つもの殿舎が連なる壮大な外観、そして障壁画や金工品などが彩る内部は、御殿の主が持つ権威を演出していました。本展ではこうした城郭御殿をめぐる変遷に注目し、その機能と美のあり方に迫ります。

序章 天守から御殿へ

近世城郭にとって重要な役割を果たした天守と御殿。天守が天下を平定する者の武力を示す役割を担ったのに対し、御殿は新しい社会秩序が作られた泰平の世における政治や儀礼の場で、為政者の権威を演出する舞台となりました。序章では、天守と御殿の役割を、城郭の実例を通して紹介します。



「匠明」殿屋集

慶長13年(1608)
東京大学大学院工学系研究科
建築学専攻蔵

幕府の作事方大棟梁・平内家に伝わった全五巻から成る木割書。その内の一冊である殿屋集では、天守と御殿の起源を記す。

第1章 御殿創建 — 厳威の顕在

城郭御殿を特徴づけるものとして、豪華絢爛な室内装飾が挙げられます。特に、内部の床や壁、襖、杉戸などを彩る巨大な障壁画には描かれた内容や配置、大きさによって空間に意味を持たせ、そこに身を置くものにメッセージを伝える力がありました。第1章では、城郭御殿の完成形と名高い名古屋城本丸御殿および二条城二の丸御殿の障壁画から、江戸時代初期に大成した権力の視覚化のあり様に迫ります。



松竹禽鳥図 名古屋城本丸御殿 表書院上段之間障壁画

慶長19年(1614) 名古屋城総合事務所蔵

名古屋城本丸御殿は、初代尾張藩主になった徳川義直の居城として慶長20年に完成した。その後、寛永11年の3代将軍・家光の上洛に合わせ増改築が行われており、慶長・寛永という徳川政権における2つ画期に制作された貴重な障壁画が現存する。



竹林群虎図 二条城二の丸御殿 遠侍二の間障壁画

寛永3年(1626) 狩野菟之丞筆
京都市(元離宮二条城事務所)蔵

二条城二の丸御殿は、徳川家康が将軍宣下を受けた慶長8年に創建され、寛永元年～3年に後水尾天皇の行幸に向けた大改修が行われた。この寛永期の御殿が建築・内装ともに現代に伝わっている。



令和5年

10/14(土)・11/26(日)

【休館日：11/6(月)】

9:00-17:00 展示室への入室は16:30まで
【10/14(土)のみ11:00開館】



会期中には夜間開館も実施します！ 9:00~20:00

10月28日(土)・11月3日(金・祝)・11月4日(土)・11月11日(土)
11月18日(土)・11月23日(木・祝)・11月24日(金)・11月25日(土)

観覧料

一般：1,300(1,000)円／大学生・専門学校生：1,000(800)円
高校生以下無料 ※()内は団体料金・65歳以上は団体料金
障害者手帳・「マイロID」ご提示の方および付添1名は無料

イベント紹介

記念講演会

襖絵、杉戸絵の画題が語る
文化度金沢城二の丸御殿

日時：10月28日(土) 13:30~15:00

講師：太田 昌子 氏

(金沢湯涌夢二館館長、
金沢美術工芸大学名誉教授)

※要申込

(応募者多数の場合は抽選)

10月16日(月)必着

その他、
講演会・セミナー・
ワークショップも
多数開催します。
詳細は当館HP・
チラシを
ご覧ください。

第2章 御殿復興 —— 先例と御好

時に城郭を襲った災害。再建には失われる前の姿に戻すことを基本方針とする一方で、時の将軍や藩主の好みに合わせて改められる部分もありました。

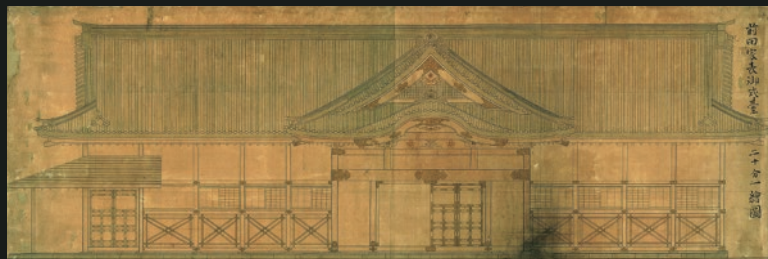
第2章では城郭御殿の復興をテーマとし、研究が進む金沢城二の丸御殿の文化度造営を中心に、復興に力を尽くした人々の活躍に注目します。



松虎図 (宮川祭颯々館楽屋襖)

享和4年(1804) 岸駒筆 長浜市宮司東町自治会蔵

文化5年に金沢城二の丸御殿が全焼すると、翌年には京で活躍していた絵師・岸駒と一門を金沢に迎え、障壁画制作を担わせた。本作は岸駒の代表作の一つ。迫力ある虎は岸駒の得意画題で、金沢城二の丸御殿でも昇殿者の控えの部屋に描いたことが判明している。



金沢城二之丸御式台絵図

江戸時代後期 金沢市立玉川図書館蔵 (加越能文庫)

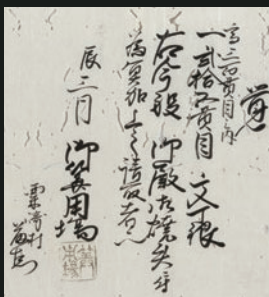
金沢城二の丸御殿の表式台・玄関・裏式台の外観を描いた立面図。中居の長押しには、加賀前田家の家紋である梅鉢紋があらわれている。



御殿御焼失ニ付冥加請取

文化5年(1808)3月
内灘町蔵 (木谷藤右衛門家関係資料)

文化度造営に要した費用の大半は、藩士や領民からの献金によって賄われた。栗崎の豪商・木谷藤右衛門は、計300貫を分割で上納した。



資料紹介

金沢城二の丸御殿の障壁画下絵

◆ 学芸主任 中村 真菜美

いよいよ10月14日（土）より秋季特別展「御殿の美」が開幕する。城郭御殿の機能と美をテーマとする本展覧会。城郭御殿の完成形として名高い名古屋城本丸御殿および二条城二の丸御殿の障壁画が揃って出品されるなど、滅多にない機会であり、その壮大さをたっぷりご堪能いただきたい。

さて、本展覧会の企画理由の1つに、石川県が金沢城二の丸御殿の復元整備に向けて積み重ねてきた調査研究の成果を示したいという思いがあった。金沢城二の丸御殿は寛永8年（1631）の大火を契機に加賀藩前田家3代・利常によって創建され、宝暦9年（1759）および文化5年（1808）に2度焼失・再建された。文化8年に完成した三度目の二の丸御殿は幕末の激動を越えたが、歩兵第七連隊の営所があった明治14年（1881）に内部から火の手が上がり、灰燼に帰した。

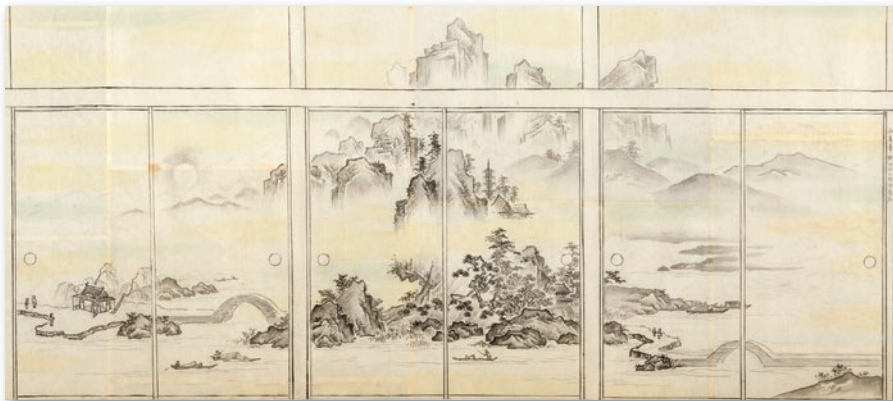
今回、石川県が復元を目指すのはこの文化度二の丸御殿だが、課題は内部を彩った障壁画である。記録から作者の名前と画題、御殿内部での位置は明らかだが、具体的に検討するには材料が不足している。そこで同一作者の作例調査と並行し、下絵が残されていないかを探し始めた。

様々な機関・関係者のご協力を得て調査を進める中、文化度二の丸御殿造営に参画した絵師にまつわる資料群に懸案の下絵を見出すことができた。まずは京都の絵師・望月玉川（1792あるいは94～1852）の下絵である。文化6年に金沢へ下向し、表向の杉戸を担当した。京都市立芸術大学芸術資料館に伝わる望月家代々の膨大な資料の中に、文化6～7年に金沢で描いたと墨書のある下絵が確認でき、1点には明確に「金沢御杉戸」と記され、二頭の馬と

その顔や足などの部分、桜花の一部が描かれていた。構想段階のものだろうか。玉川は松之御間の御小書院との廊下境の杉戸に「桜山に駒」を描いたと記録され、これに該当する下絵と考えられる。また「文化七年庚午仲夏金澤寫 芦雁極彩色仕立圖」と記された1点は、玉川が御小書院から檜垣之御間へ至る廊下境の杉戸に手掛けた芦雁図の下絵と想定される。

次に文化度造営を機に躍進した加賀藩御用絵師・佐々木家の資料群である。その中に西湖を描く障壁画の小下絵があり、内法長押上まで絵が展開する様は、大きな御殿空間を想像させる。しかも、文化度造営時の御居間御上壇・御下壇の障壁画は確かに西湖図だった。しかし、担当したのは佐々木家の当代・泉景（1773～1848）ではなく、森西園（1783～1859）という別の画家。加えて文化度造営時の御居間にはない張台構という座敷飾があるように表されている。「画家も設えも違う…」と諦めかけたが、実は御居間は造営以後に改修されており、幕末頃の御居間がこの小下絵とぴったり合う設えであることが判明した。さらに佐々木家の由緒帳から泉景の息子である泉玄（1805～79）が安政5年（1858）に御居間の改修に携わったことが確認できた。

このように少しずつではあるが、全て失われたと思われていた金沢城二の丸御殿の障壁画に関わる資料も見つかった。上記の資料も展示するので、是非ご覧いただきたい。文化度造営を担当した役人の日録には毎日のように障壁画の下絵を確認、修正を指示といった様子がうかがえる。この沢山の下絵がどこかに一括で眠っているのでは…。そんな期待を胸に展覧会が開けてもまだまだ下絵探しの旅は続くのである。



佐々木泉玄「粉本：西湖之図唐絵」(部分) (安政5年(1858)、個人蔵)

考古資料の調査方法について

学芸員
コラム
Column

学芸員 野村 将之

博物館が収蔵する資料には、その分野（当館では、考古・歴史・民俗・美術の4分野に分かれています）ごとに調査の技法があります。ここでは、その中から考古資料の調査時に使われる技法についてご紹介します。

考古資料の調査に使われる基本的な技法には「写真撮影」と「実測」、「拓本」の3つがあり、遺跡の発掘調査報告書や考古の論文などではこれらの技法で作成された図面や写真が用いられます。写真撮影はすべての分野に共通するものですが、残り2つは考古資料ならではのといえるかもしれません。「実測」は方眼紙や定規を用いて、立面図や断面図などの資料の実測図を作成するものです。資料1点につき数種類作成することがあるほか、測定する箇所も数十か所以上になることもあるので、かなり時間と根気が求められる作業です。また、「拓本」は資料に紙を当てて、その上から墨を打つことによって、資料の文様や銘文を写し取るものです。調査時に説明する際には魚拓をたとえに出すこともあり、肉眼では見えなかった情報も分かることがある反面、墨を使うので資料を汚してしまう可能性もあります。

ところで、近年では3次元計測に代表されるようなデジタルな手法が普及してきています。なかには費用的に個人でも導入できるものも増えています。これらの特徴としては、コツさえつかめば通常の実測・拓本よりも短時間で終わられる点、拓本のように資料を汚す可能性がほとんどない点、実測や拓本に比べ習得までのハードルが低い点があると思います。調査時間を短縮できる点は、遠方での調査時など、時間的制約がある状況で調査できる資料が増え、個人所蔵の資料の場合は、立ち合いなどの時間が減ることによって所蔵者の負担が軽くなるといったメリットがありそうです。また、導入や習得までの費用的・技術的ハードルが低い点は、博物館施設では「友の会」やボランティアと連携した活動が期待できそうです。すでに博物館の中では、展示室にタブレットを設置して、3Dモデルを体感してもらおうという試みを行っているところもみられます。

ここまで、新しい手法のメリットを挙げてきましたが、実測図や拓本などの、従来からある手法が完全になくなっていくかという点、そういったことは

ないと考えています。その一例として、当館が開催した夏季特別展「いしかわの霊場」では、中世の供養塔とみられる資料である「板碑」を、拓本を採ったうえで原寸大のタペストリーにして展示するという試みを行いました。板碑のように現地からの運搬が難しい大型資料の場合、ほぼ原寸大で、かつ墨の濃淡が表れる拓本の方が、資料が持つ迫力を体感しやすいように思います。

近年、人工知能（AI）の導入をはじめとして、さまざまな分野で新たな技術の普及が進んでいます。考古資料の調査手法についても、「アナログ」から「デジタル」へのいわば過渡期といえるのかもしれませんが、「資料をしっかりと観察し、特徴を捉える」という基本的なスキルが必要という点では、どちらも同じなのは言うまでもありません。今後は、双方の特徴をしっかりと把握しつつ、場合にに応じて適切に使い分けられるように努力したいと思っています。



金沢市普正寺遺跡出土如来立像板碑（当館蔵）
左は拓本、右は奈良文化財研究所が開発した「ひかり拓本」®を使用して作成したものの。
所要時間は拓本が30～40分程度、
「ひかり拓本」が5分程度。



〈加賀料理〉考

学芸主幹兼普及課長 大門 哲

加賀料理という言葉がある。県や市のフリー観光写真を検索すると、豪華な料理がみえる。はたしていつからこのような言葉／イメージが成立したのだろうか。

国立国会図書館のデジタルコレクションを調べると大正3年（1914）の三宅花圃『その日その日』がヒットする。夫・三宅雪嶺の故郷金沢への帰省中の様子を記すなかで登場する。これより古い記録は管見にいたっておらず、現時点では初出と位置づけられる。

ただし、大正期、地元で加賀料理という言葉が使われていたわけではない。石川県の雑誌・新聞で目につくのはようやく昭和以降である。昭和10年（1935）『観光の金沢』4号掲載の木村捨三の随筆「思出の金澤」が早い例である。

しかし、前年（1934）の同誌2号掲載の元官僚の鶴見左吉雄「金澤に對する私の随感随想」には「金沢料理」とみえ、実質、昭和以降も加賀料理は馴染みがなく、一般的なのは金沢料理の方だったと判断できる。

では金沢料理とはなにか。結論からいえば、誘客拡大に向け都市の魅力として料理店を紹介・宣伝するために生まれた言葉である。金沢の料理店の案内は古くは安政6年（1859）の『千登里杖』に16店みえ、また明治27年（1894）『金沢市街獨案内』に「割烹店」18店、明治35年（1902）『金沢新繁昌記』に「料理店」26店、明治37年（1904）『金沢明覧』に「料理店」19店がそれぞれ紹介されているが、金沢料理の宣伝はみられない。

金沢料理のブランド化志向が見て取れるのは明治41年（1908）9月に「北陸新聞」に連載された「食道樂市中の料理屋覗き」が最初である。市内の老舗料理店の特徴を紹介した記事に以下の批評がみえる。

「金沢料理の特長は如何なる点に存するかと訊かれても、果たして何と誇るべきものが有るであらうか。金沢特産の鮎や、烏賊、蟹、海老、鮎などの料理を以て之に答へんとするのは、金沢料理の發達して居ないのを吹聴するに異らぬ。若し是等の品を東京或は大阪邊りに採れるものとしたならば、まだまだ上手に調理して其天然の風味をしてより以上に發揮せしめて居るだらう。（中略）故に忌憚なく論ずれば金澤の料理は進歩して居ないものと斷言せざるをえない」

魚介類の料理をあげるだけでは特徴にならないと手厳しい言葉が並ぶ。このような批評記事が書かれた背景には明治41年（1908）9月の金沢料理会の発足があった。料理会は市内の紳士紳商と有名割烹店の主人がつくった料理研鑽の場で、会員は200名以上を数えた。

当初の目的は西洋料理のクックが他地方の名人を招いて相互に研究することにあったが、しだいに日本料理店の主人も参加し、毎月1回市内の有名料理店で腕を競い、会員の批評を乞うようになった。第1回目の会には旧幕府料理方頭取・四条流宗家の石井家9代泰次郎を招き指導を仰いでおり、会の意気込みをうかがえる。

このような金沢料理への冷厳な批評は昭和初期の観光ブームでもみられた。『観光の金沢』2号で関西の実業家・林安繁は「料理屋も関東関西の真似をして居ては駄目である。何處かに金澤の特色をちゃんと存しておかねばならぬ」と指摘する。

また右掲の随想で鶴見左吉雄は「金澤料理に就て管見を述べてみよう。（中略）郷土的に特色のあることが第一の興味である。金澤料理は塩辛いと謂ふ人がある。それは東京のやうに煮物に砂糖を使はないで生醤油で煮つける風習からであらうが、私は、そこに又言ふべからざる味覺の美があるやうに思ふ」とし、特色をみがき東京へ進出し観光誘致の一手段とすべきと説く。

このように金沢料理に対する意見は長らく無個性であることへの批判が中心だった。一方、大正の終わりから地元料理をとりあげ、金沢の食文化を称える意見も目立つようになる。

たとえば日本最初の旅行作家・松川二郎は大正14年（1925）「炬燵酒恋し北国の旅」（『中央公論』40年2号）で金沢を長崎と並ぶ「地方の料理国」とたたえ、代表料理としてゴリ汁（カジカの味噌汁）を示し、東京の泥鰌汁より遙かに美味と絶賛した。

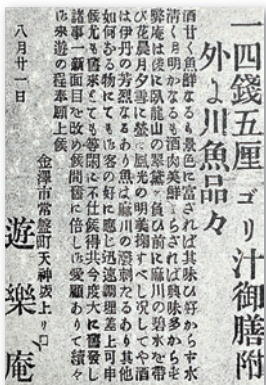
また松川は大正15年（1926）『名物をたづねて』（博文閣）で金沢人の味覚の鋭敏さをこう評価する。

「喰ひ物にかけては不思議に敏捷に立廻り、殊にまづい材料を使つて美味しく食う獨特の技能に関しては、全く敬服せざるを得ない。彼等は先づ犀川のゴリを食ふことを覚え、とうとうそれを金沢名物にしてしまつた如きは、その著名な一例で、次いで「鱈すし」、「鯨のすし」、鰯や河豚の「小糠漬」「寒鮎のそろばん」等々。鯉よりも鮎を珍重し、隣国越前では多く鶏の餌料にして居る「ウグイ」を輸入して賞味するなど、その味覚は可なり鋭敏なものである」

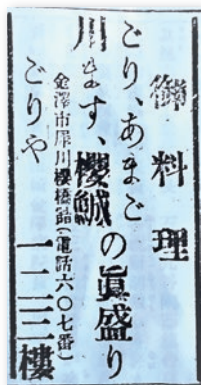
大阪割烹学校校長・的場多三郎は各地の料理を紹介する昭和3年（1928）『調味百趣』（大阪割烹学校々友会）で、金沢の代表に「ジブと鮎のソロバン」を推す。ソロバンとは小鮎をぶつ切りにし大根おろしなどで食べる料理である。通称は背骨の断面が算盤に似ていることに由来する。

昭和4年（1929）の二木敏郎（本名：林安繁）『惜春録』（『白雲深处漫筆』）は、「金澤料理にいたりては、素と茶料理が基礎となりて、自ら郷土色がその間に備はつて居るなり、しかるに動もすれば近來は關西料理の真似事をなし、金澤料理の特色を失はんとす。（中略）金澤の郷土色の濃厚なる金澤料理を保存發達助長せしむるの必要を感じるものなり」とし、蕪寿司・鮎のうるか・ぎすし鯖・モミ烏賊・烏賊の黒作り・河豚の糨漬けをとりあげた。

1920年代以降、金沢料理の代表とされたのは川・潟の魚や里山の鳥を素材としたものであり、とりわけゴリ料理であった（図参照）。明治時代、金沢の料理店は2系統に分かれた。犀川系と浅野川系である。料理店が川のそばに集中したのは眺望の良さや舟運の利便はむろん、川魚をなにより重視したからだと理解できる（写真参照）。



【図1】
料理屋「遊楽庵」(浅野川天神坂)
の新聞広告。
浅野川の魚料理を宣伝。
明治22年8月25日「北陸新報」



【図2】
料理屋「ごりや 一二三樓」
(犀川桜橋詰)の新聞広告
明治44年4月27日「北國新聞」



【写真】
蛤坂上(犀川縁)にあった料理店「望月」(明治41年開業) 絵葉書
料理店は眺望の良さを競った。

加賀料理という通称が定着するのは昭和40年代以降である。その画期といえるグルメガイド本が昭和46年（1971）『百万石食べあるき』（毎日新聞金沢支局）である。その刊行目的にこうある。「北陸の観光はついでこの間まで一にも二にも温泉でした。だが、もはや温泉観光がすべてという時代は過ぎつつあります（中略）。県下各所の魅力を一段と増すものはおいしい食べ物の存在でしょう。二百七十年の伝統を持つ加賀藩にはそれが随所にあるのです」。温泉にかわり加賀藩にちなむ食べ物を観光の目玉にすべきと提唱したわけである。現代、流布している加賀料理のイメージはこのころから広まったと理解できる。

加賀料理の歴史を振り返って思うのは現在までに失った姿勢が二つあるということである。ひとつは川・潟の魚へのこだわりである。2010年、江戸時代からの店名（商号）をひきつぐ常盤町の老舗ゴリ料理専門店・ごりやが廃業し更地となった。新聞一社が報じたただが、ことの重大さは料理の歴史からして明らかである。そして、もうひとつは総合美の希求である。

戦前、金沢料理への批判が目立つなか、激賞されたのが稀代の文化人であり、山の尾の店主だった太田多吉（1852-1932）である。太田が追求した料理とは、調理はいうまでもなく、礼式作法、茶の湯、生花他あらゆる流派にこだわる、総合美の世界であった。太田は金沢料理を究極の文化体験へ昇華させようとしたのである。加賀料理のブランドを高める上で、失った二つの姿勢から学べることが少なくないと思う。

催し物
案内
Information

展示解説や各種講座などの情報をお知らせします。
※各種催し物の詳細については、当館ホームページにてお知らせします。

10月 休館日：10/11(水)～13(金)

- 14日(土) **館長講演会** 聴講無料/要申込
「加賀百万石の成立」
講師：藤井 譲治
(当館館長、京都大学名誉教授)
- 18日(水) **「御殿の美」** 要展覧会チケット/申込不要
モーニング展示解説
- 28日(土) **「御殿の美」** 聴講無料/要申込
記念講演会
「襖絵・杉戸絵の画題が語る
文化度金沢城二の丸御殿」
講師：太田 昌子氏
(金沢湯涌夢二館館長、
金沢美術工芸大学名誉教授)

- 3日(金・祝) **「御殿の美」** 要展覧会チケット/申込不要
ナイト展示解説
- 4日(土) **「御殿の美」** 参加無料/要申込
ワークショップ
「和綴じノートをつくって、
金沢城のインテリアを学ぼう!」
講師：萩原 真人氏
(金沢美術表装協同組合代表理事)

- 23日(木・祝) **石川の歴史遺産セミナー** 聴講無料/要申込
「加賀藩と公家社会」第3回
「前田斉広の初政と真龍院との婚姻」
講師：石野 友康氏
(石川県金沢城調査研究所担当課長)
- 23日(木・祝) **「御殿の美」** 要展覧会チケット/申込不要
ナイト展示解説
- 30日(木) **いしかわ歴史講座** 聴講無料/申込不要
「稲作の伝来と北陸のコメづくり」
講師：野村 将之 (当館学芸員)

11月 休館日：11/6(月)
11/27(月)～29(水)

- 3日(金・祝) **石川の歴史遺産セミナー** 聴講無料/要申込
「加賀藩と公家社会」第1回
「狩野探幽と俵屋宗達
—江戸初期の画家と宮廷—」
講師：奥平 俊六氏 (大阪大学名誉教授)

- 11日(土) **れきはくゼミナール** 聴講無料/申込不要
「金沢城における幕府上使の饗応」
講師：吉田 朋生 (当館学芸員)
- 12日(日) **石川の歴史遺産セミナー** 聴講無料/要申込
「加賀藩と公家社会」第2回
「「式学」としての和歌と加賀藩」
講師：濱岡 伸也氏 (加能地域史研究会会員)

- 7日(木) **いしかわ歴史講座** 聴講無料/申込不要
「蝦夷穴古墳が造られた時代」
講師：三浦 俊明 (当館資料課長)
- 21日(木) **いしかわ歴史講座** 聴講無料/申込不要
「加賀能登の荘園」
講師：岡崎 道子 (当館学芸主任)

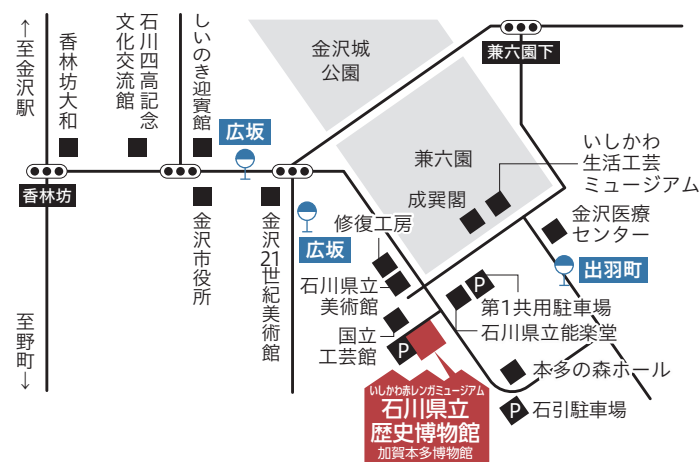
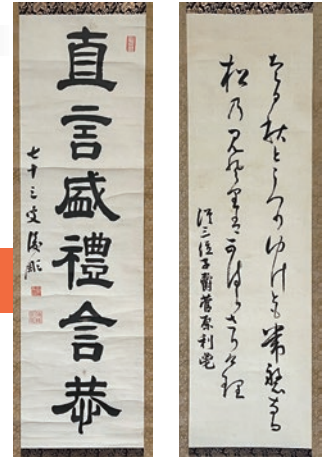
12月 休館日：12/15(金)
12/28(木)～31(日)

次回
展覧会
のお知らせ

企画展
れきはくコレクション
2023

令和5年(2023)12/16(土)～令和6年(2024)1/21(日)

寄附や購入により、本館が2023年に収蔵した資料を中心に、本館のコレクションを一堂に公開します。
(左)前田斉泰書幅/(右)前田利啓書幅▶



いしかわ赤レンガミュージアム
石川県立歴史博物館
ISHIKAWA PREFECTURAL MUSEUM OF HISTORY

〒920-0963 石川県金沢市出羽町3-1
TEL: 076-262-3236 FAX: 076-262-1836
E-mail: rekihaku@pref.ishikawa.lg.jp
https://ishikawa-rekihaku.jp/



石川県立歴史博物館
「石川れきはく」
に広告を掲載してPRしませんか？
れきはくメイト(友の会)会員、学校、博物館、図書館、その他公共施設へ 配布!!
ターゲットを狙った 知名度向上
石川県立歴史博物館の 信頼度の高い 広報媒体
お問い合わせは 株式会社 ジチタイド ☎092-716-1401
福岡県福岡市中央区薬院1-14-5 MG薬院ビル7F 財源確保 検索
※株式会社ホープの広告事業は、2021/12/1付で「株式会社ジチタイド」に会社化しております。